

君だけは思い出したくない

「誰だ？」

世にも不機嫌な顔で、和装の男は言った。

野川凛花はひるみそうになるも、すぐさま営業スマイルを顔に貼りつけて尋ねる。

「若御門遠介さまですか？」

男は肯定も否定もせず黙している。男の身長は一八〇センチメートルを超えているだろうか。玄関の引き戸に寄り掛かり、険しい顔で凛花を見下ろしている。浴衣の袖から見えた左腕は筋肉質でよく日焼けしていた。くしゃくしゃの黒髪は伸び放題で、無精ひげがシャープな頬骨を覆っている。眉は眉尻に向かうほどキリツと上がり、一重のクールな双眸は殺気立っていた。

テレビで見たときと随分印象が違うなど、凛花はそれとなく相手を観察する。てつきり柔和なお坊ちやまタイプかと思っていたけど予想よりも遥かにワイルド……というより、目つきが悪くて凶悪犯みたいだ。

彼はよくワイドショーや討論番組にコメンテーターとして出演していた。堂々とした物腰に、

はつとする美貌の持ち主だったのに、今は見る影もない。

事前の情報にあつたとおり、左足にギプスをしているから、この男が若御門遼介で間違いないだろう。確か年齢は凧花より二歳年上の二十八歳のはずだ。

凧花は営業スマイルをキープしながら事務的に言葉を続けた。

「申し遅れました。私、株式会社ハートフルアンバサダーの野川凧花と申します。派遣のハウスキーパーをやっております」

「ハウスキーパー？」

「はい」

凧花は愛想よくうなずき、お決まりの口上を述べる。

「炊事や掃除などの家事全般や、介助の必要な方のサポート。他にも書類作成や電話応対といった秘書的な業務も承っております。弊社はお客さまへの心のこもったサービス、温かく細やかな介護をモットーに活動しております」

「頼んでない」

遼介はにべもなく言いつつ引き戸を閉じようとした。凧花はとっさに足を踏み出して、刑事ばりに閉扉を阻止する。遼介は露骨に眉をひそめた。

「本日は弊社の社長である若御門礼子の依頼で参りました」

凧花は懸命に引き戸を押さえながら言う。

「叔母の……？」

聞き返した遼介の表情が少し和らいだ。

「はい。遼介さまのお世話をするようにと」

そう言いながら凧花は、遼介の背後にそっと目を遣る。

武家屋敷みたいな大豪邸にふさわしく玄関は広々としていた。三和土には綺麗に石が敷き詰められ、銘木で作られた式台はつやつやと光沢を放っている。玄関の真正面には円形の見事な透かし障子が貼られており、その前にウン千万はしそうな壺が鎮座していた。さらに壁には、超有名な日本画家の絵が掛けられている。

——さすが旧若御門財閥の別荘は違うなあ。どこかの美術館みたいなんですけど。

贅沢とは無縁の人生を送ってきた凧花は思わず感心してしまう。そんな凧花を、遼介は不躰な視線で、頭の先から爪先までじろじろ眺めている。

凧花は急に場違いな気がしてきた。彼の目に自分がどう映っているのか心配になる。本日の凧花はふんわりパーマの黒髪をきっちり束ね、ゆったりしたベージュのニットに、くるぶしの上まである黒のパンツというラフな格好だ。

ハウスキーパー、そして介護職というのはなかなかの肉体労働で、動きやすさが重要だった。もともと化粧に興味はなく、普段からベージュピンクの口紅を薄く引いているだけだ。職場には派手な女の子が多いので、同僚からは「清楚系女子」と評されることもある。灰色がかった黒い瞳にま

ぶたは幅のある二重で、鏡を見るたびに、我ながら眠そうな顔だなと思う。鼻は高くも低くもなく、強いて言えば下唇がふつくと厚めなのが特徴だろうか。

美人でもなければ不細工でもない。どこか気怠そうな雰囲気、これと言って目立つところのない女。

以上が凜花の自己評価だった。

「おい。もしかしてこれ、あなたの荷物か？」

遼介は迷惑そうに顎をしゃくる。

見ると、玄関の式台を上がったところに大小さまざまな段ボール箱が並べられていた。ケア用品や食材、衣類や医療品など凜花の仕事に必要なものがすべて揃っている。

ちゃんと届いていたのねと、凜花は満足して微笑み「そうです。私のです」と言った。

「今朝いきなり届いたんだ。送り主に覚えはないし、返送しようと思っていた」

「申し訳ございません。礼子さまから連絡がいつてると思っていたんですが」

「どっちにしる帰ってくれ」

「え？」

「叔母の指示だろうがなんだろうが、頼んでないものは頼んでない。帰ってくれ」

遼介は怠そうに松葉杖を脇に挟むと、くるりとうしろを向いて式台上がった。

「ちよっ、ちよっど待ってください！ 帰らせて言われてもどうやって帰ればいいんですか？」

東京から新幹線で約二時間半。私鉄の特急に乗り換えて一時間。そこからバスに乗り換えて山を越えて二時間。さらにバス停から歩いて三十分。合計六時間近くかけてここまでやって来た。間違はなく今日中に東京まで戻れない。いや、最寄りの駅まで戻れるかも怪しい。

「もう最終バス行っちゃったんですけど？」

現在時刻は十六時過ぎ。ド田舎は終バスも信じられないほど早い。

遼介は鬱陶しそうに振り返り「歩いて帰れば？」と冷たく言った。

凜花は信じられない思いで目を見開く。

——歩いて帰ればですって？ 何十キロあると思ってるの？ あの山道歩いて帰れとか、鬼なの？ 悪魔なの？

「なら、せめてタクシーを呼んでください！」

凜花は猛然と主張した。

「こんなところにタクシーなんか来るかよ」

遼介はせせら笑う。

「そんな……困ります！」

屋敷は山の溪谷を切り拓いたところにポツンと建っていた。西側に木々が茂る山の斜面、東側の谷底に大きな溪流がある。人家は他に見当たらない。表に遼介のものらしき高級車が停まっているけど、足を怪我している彼に運転は無理だろう。

「私、どうすればいいんですか？」

「知るかよ」

遼介はふたたび引き戸を閉じようとした。凜花は必死で引き戸を押さえ、閉じさせまいと粘る。遼介はイライラと舌打ちした。

「そこ、どけよ」

「ちよつと待ってくださいってば！」

引き戸を閉じようとする遼介と開けようとする凜花。二人は睨み合いながら、ギリギリと戸を掴む手に力を入れた。二人の力で古風なガラス張りの引き戸がガタガタと震える。右手も怪我をしている遼介は左手だけで、凜花の両手の力に拮抗していた。

——ちよつと、ここで帰されちゃったら話が終わっちゃうじゃないっ!!

凜花は両手に力を入れて必死に踏ん張る。

そのとき、携帯電話の着信音が鳴り響いた。

——あ、私のだ。

慌ててキャンバスバッグからスマートフォンを取り出し、液晶画面を眺める。

「あ、社長からだわ」

わざと大きな声で言い、指先で通話ボタンをタップした。遼介はその様子をじっと見つめている。

「はい。野川です」

『やつほく凜花ちゃん？ 礼子よお。無事着いた？』

受話口から若御門礼子の能天気な声が聞こえてくる。

「はい。無事に着きました」

『もうクツクツツソみたいいなド田舎でしょ？ 水道と電気通ってるのが奇跡なのよ。その辺の山って全部若御門の敷地で、その忍者屋敷もすぐく歴史があるの。ワケありの人が身を隠したりするのに使ってたらしいのよね。罪人かぐま匿かくまつたりとか時の権力者の落としたねが住んでたりとか、逢引きとか？』

礼子はどこまで本当かわからない話をペラペラとまくしたてる。

『うちの甥おひつこちゃん、例の事件で大騒ぎになってマスコミにあれこれ取り沙汰さたされたでしょ。それででは、パパラッチに追いかけられるのに疲れちゃったみたいなの。あ、うちのスイートな甥おひつこちゃんにはもう会えたのかしら？』

「今、ちよつと遼介さんにお会いしたところなんです。スピーカー通話にしますね」

遼介を気にしながら、凜花はスピーカー通話に切り替えた。

『あら。じゃあ遼タンもそこにいるのかしら？ おーい、遼タン？ 聞こえる？ 怪我の具合はどうお？』

礼子の明るく屈託のない声が響く。若々しい声だが、彼女はこれでも去年還暦かんれいきを迎えていた。

——遼タンだって！ どう見ても遼タンってガラじゃないでしょ。

凜花は嘔き出しそうになるのを必死に堪える。

「叔母さん！ その呼び方はやめてください」

遼介が焦った様子で言う。

『あらあ。だって遼タンは遼タンじゃない。私の中ではいつまでもちっちゃくて可愛くてオネシヨしてた愛しの遼タンなのよ♪』

「と、とにかく。勝手なことをされては困ります。彼女にはお引き取り願います」

『えーっ？ でも、誰か寄越してくれて頼んできたのは遼タンじゃなーい』

「それは僕と同じぐらいの体格の男を頼んだんであって、家政婦を頼んだわけじゃありません……」

『大丈夫大丈夫。凜花ちゃん超優秀だから』

礼子は明るい声で遼介の言葉を遮り、さらにペラペラ喋り続けた。

『お料理上手だし、テキパキしてるし、パソコンも使えるし、とつても有能なのよ。彼女は我が社のエースなんだから』

「有能だろうが関係ない。勝手に押しかけられても困ります。帰ってください」

『ええーっ!? どおしてそんな冷たいこと言うのお？ 大体、帰れなんて言っても、そんな秘境じゃバスも電車もないじゃない。冷たいこと言わないで、一晩ぐらい泊めてあげて。私の頼みでわざわざ行ってくれたんだから。お部屋はいっぱいあるでしょ？』

「それはそうだが」

遼介は嫌そうに凜花をちらりと見てから付け加えた。

「わかりました。ですが、一晩経ったら帰ってもらいますよ」

『そう言われてもねえ……代わりの男性スタッフなんていないのよ。それに遼タン、介助なしじゃご飯もお風呂も一人じゃ無理でしょ？ だって右手指切断に、左足骨折ですもの』

礼子に聞いた情報によると、遼介は高速道路で自動車事故を起こし、右手の指を切断した上に、左足指のつけ根にある中足骨を骨折したそうだ。幸い手の指の接合手術は成功したが、リハビリを含めて全治三か月と診断された。左足も皮膚に損傷のある複雑骨折で手術をしたばかりで、感染症の心配もあるから安静が必要らしい。

『私が行ってあげられればいいんだけど、困ったわ。私、虫が苦手なのよ……』

礼子は鼻にかかった声で言う。

「結構です。僕が自分で手配しますから」

遼介はビシヤリと断った。

『手配って、業者に頼んでまた情報をリークされたいの？ あっという間に、そこへマスコミがわんさか押しかけるわよ？』

「それは……」

『だったら、病院に戻りなさい！』

「冗談じゃない。それだけは絶対嫌だ！」

『なら、凜花ちゃんに手伝ってもらうのね。これは叔母としての命令です！ ちょっと凜花ちゃんに代わってくれる？ 二人だけで話したいの』

凜花はスピーカー通話から通常の通話に戻し、遼介に聞こえないようにしてから「もしもし？」と声を掛けた。

『凜花ちゃん？ ごめんなさいね。うちの甥おひつ子、ちょっと気難し屋さんなの』

「いえ。大丈夫です、全然ぜんぜん」

凜花がちらりと目を遣やると、遼介はむちゃくちゃ怖い顔で睨にらんでいた。

『口ではああ言ってるけど、たぶんひどい状態だと思うの。ご飯もまともに食べてないだろうし、お風呂も入ってないんじゃないかしら。悪いんだけど、どうにかして面倒見てあげてくれない？ 本人は嫌がるだろうけど、そこをなんとか支えてあげて欲しいの。あなたの力で』

「はい。やってみます」

『たぶん、マスコミに追い回されたせいで、ちょっと人間不信になってるのよ。ほら、一般人に写真撮られたりしたでしょ？』

凜花の脳裏に週刊誌の記事が蘇よみがえった。

病院の看護師が、入院している遼介の写真をネットにリークしたのだ。滅多にないこととはいえ、気の毒な話だ。

『だから病院も嫌がって逃げ出しちゃって……可哀想なの。遼タン、元はそんなに悪い子じゃない

のよ。頭もイイし、顔もイイし、とつてもお茶目で優しい子なの。どこかの業者に頼んだら、また病院の二の舞いになるわ。だから凜花ちゃんに是非ともお願いしたいのよ』

「私もできるだけ力になりたいです」

『もう少しまく住み込むことができれば、報酬は約束してた額の二倍払うわ』

礼子はさらりと条件を上げてきた。

「えっ、本当ですか？」

『もちろんよ。あとはあなたの手腕次第。時間を稼いで、遼タンの懐なつこにうまく入り込むのよ！』

「承知しました」

『またスピーカーにしてくれる？』

言われたとおり通話を切り替えた。聞こえるよう、遼介の前にスマートフォンを差し出す。

『遼タン？ おばさんね、お見舞いになにか送ろうと思うんだけど、なにがいいかしら？ 遼タン、現金なんてうなるほど持つてるし、お金じゃアレかなあと思って……』

「要りません」

『お菓子なんか要らないわよねえ』

礼子は人の話をまったく聞かず、しばらく思索してからこう言った。

『あ、あれはどうかしら？ ぬいぐるみ！』

——ぬいぐるみですって？

またしても凜花は嘔き出しそうになる。

「そ、そんなの要るかよっ!!」

『あらあ。そう言うけど、あなたほら昔…なんだっけ？ ステゴサウルス？ トリケラトプス？ 恐竜のぬいぐるみが一緒じゃないと眠れないって、わあわあ泣いてたじゃない』

「それは小さい頃の話だ！ と、とにかく、今夜は仕方ないから泊まってもらいますが、明日になったら引き取ってもらいますから」

『わかったわ。じゃー、お見舞いは大きなぬいぐるみにするわね。あなたも大きくなったことだし』

堪らず嘔き出すと、遼介に射殺される勢いで睨まれた。

意外と優しいところがあるじゃない、と思う。なんだかんだ言っただけで札子に譲歩し、完全に否定しないし切り捨てない。取り付く島もない鬼みたいな男でも、どうやら叔母に対する愛情はあるらしい。

『じゃー二人とも、仲良くやるのよ？ 凜花ちゃんが美人だからって、手つけちゃダメだからね！

あ、もちろん双方合意の上なら、おばさんうるさいこと言わないから。ふおっふおっふお』

「そんなことするか！」

『それじゃ、アディオウス！ オルボワール！』

通話はそこで一方的に切れた。

「というわけで、一晩お世話になりますね」

凜花はすかさず言っただけで微笑んだ。

遼介は舌打ちしてから、「今回は叔母に免じて屋敷に入れるが、明日の朝一で帰れよ」と念を押した。

「はい！」

元氣よく返事をした凜花は、内心、それはどうかかな？ とほくそ笑む。

「勝手に上がってくれ。悪いがこんな状態なんで部屋に案内もできないし、お茶も出せない。空き部屋は腐るほどあるからどこか適当に使ってくれ」

「大丈夫です。お手を煩わせたりしませんから」

凜花はそう言うのと、玄関に届いた荷物をときばきと仕分けし始める。遼介は呆れたようにそれを眺めたあと、松葉杖をつきながら屋敷の奥に消えていった。

凜花はよし、と小さくガッツポーズを決める。

なんとか屋敷に入れたぞ。どうにか彼の信頼を勝ち取って、絶対にこの仕事を成功させなくちゃ！ 明日の朝までが勝負だ。

なんとたつて、報酬は二倍なんだから！

「うっわ……。ナニコレ……」

キッチンに足を踏み入れた瞬間、凛花は思わず声を上げてしまう。

若御門邸のキッチンはゆうに二十畳はあった。

ヨーロッパ風のインテリアで、リフォームしたてなのか壁も床もピカピカだ。中央に大きな大理石のカウンターがあり、東側は天井までガラス張りの開放的な空間だった。巨大な冷蔵庫に、四口もあるガスコンロ、埋め込み型のオープンレンジは最新式でレストランの厨房みいだ。これなら料理教室でも開けそう。

しかし、そんな立派な設備が台無しになるほどキッチンは荒れ放題だった。

ビールやチューハイの空き缶、パンやお菓子のビニール袋、中身の残った缶詰やカップ麺がカウンターや床に散乱している。その上、空き缶からこぼれた液体や食べ残しが、ひどい腐臭を放っていた。エネルギー飲料や栄養ドリンクの瓶も交ざり、彼がまともな食事をしていないことは一目瞭然だった。

こりゃあよつぽどだぞ。料理をする前にまずは掃除しないと……

凛花はエプロンをつけ、さっそく作業を開始した。まず、玄関から運んできた食材を冷蔵庫に入れていく。幸い冷蔵庫の中は空っぽですべての食材が収まった。

次に床やカウンターに散らかったゴミを分別しながらゴミ袋に拾い集めていく。腐臭を放つ生ゴミは、袋の口をきつく縛って勝手口から外に出した。天井まである掃き出し窓を開け放つと、秋の爽やかな風が吹き込んでくる。淀んだ空気が、すーっと浄化されていく気がした。

九月の上旬。都心はまだ残暑が厳しいけれど、山奥のこの辺りはすっかり秋の気配に包まれていた。薄手のニットだけでは少し肌寒く感じる。

青々とした葉が目に眩しく、重なり合った木々の隙間から、勢いよく流れ落ちる溪流が見えた。耳を澄ませると、ザアアツツという水音が聞こえてくる。山の清々しい空気を胸いっぱい吸い込み、よし、と気合を入れ直した。そして、掃除用具入れからほうきとモップを見つけ出し、ほこりの積もった床を丁寧に掃いていく。

凛花は無心かつ着々と作業を進めていった。ハウスキーパーの仕事に就いて六年目になるが、住み込みは一度も経験がない。今回は礼子社長たつての依頼だし、思い切って引き受けることにした。なにより破格の報酬が魅力的だった。特別ボーナスと特別出張手当という名目で月収の三倍ほどの金額が支給される。

しかも、さっきの電話によれば、その報酬がさらに二倍だ……
それだけ払ってでも、必要な仕事ということ？

若御門遼介に個人的な興味はない、と言えば嘘になる。

世の若い女性にとつて、若御門遼介は良くも悪くも気になる存在だと思ふ。

彼の経歴は華々しい。誰もが知るアメリカの一流大学の大学院を修了したあと、世界的な有名ブランドのマーケティング部門に就職し、若くして日本支社長まで上りつめた。二十八歳になると、コミュニケーション・コンサルタントとして独立。高いセールス力や交渉力、プレゼンテーション

能力を活かし、日本のビジネスマンを支援していた。開催するセミナーは超満員、講演会には引っぱりだこ。自己啓発系の著書を多数出版し、テレビやネットで顔を見ない日はなかった。

コンサルタントという肩書を持つタレントは、他にもたくさん存在する。その中で、彼が注目を浴びている大きな理由は、整った容姿にあるらしかった。まさに異彩を放つという言葉がぴったりで、彼は立っているだけで独特の存在感があった。「talent」の単語が持つ本来の意味であり、「特別な才能」のある人だった。

長身で、モデルのように小さな顔と長い手足、そして凛としたたずまいはテレビ映えも抜群だ。遼介は、的確なコメントと若者らしい舌鋒の鋭さで人々を魅了していった。メディアは視聴率を稼げる彼をこぞって起用し、その発言はたちまちSNSで拡散される。OLや主婦たちの好きなトレンドランキングでは常に彼の名前が上位にあり、学生たちは彼の生き方を真似しようと著書を買った。

時代の中には、時として大きな渦の中心に立つ存在がいると思う。表舞台に現れて一躍脚光を浴びると同時に、批判も受ける人物だ。いわゆる「時代の寵児」と呼ばれる人々で、若御門遼介がその一人であることは間違いないかった。

——例の事件が起こるまでは。

要するに私とは住む世界が違うんだよねと、凛花はキッチンシンクの磨きながら思う。

遼介とはさつき玄関で会話を交わして以来、顔を合わせていない。彼は家の奥へ引込んでし

まったきり、出てくる気配がなかった。歓迎されない身で深追いするのも気が引けて、凛花はこうしてこっそりキッチンを掃除している。

時刻はもうすぐ十九時になるうとしていた。初日にやるべき仕事は、まず荷物をほどこいて作業環境を整え、晩御飯を作ることだった。礼子の個人的なサポートもあり、高品質で鮮度のよい食材をたくさん仕入れてある。

掃除がようやく一段落し、凛花はさっそく調理に取りかかった。フライパンや鍋やおたまといった調理器具はキッチンにすべて揃っている。一心に米を研いでいると、ここへ来る前に礼子から言われたことを思い出した。

——根本的にはなにも解決していないのよ。相変わらず誹謗中傷の嫌がらせがあとを絶たないし。なにより、信頼していたパートナーに裏切られたダメージが一番大きいと思うの。

礼子は、遼介の現状についてそう語った。

彼の身に起こった一連の事件——傷害事件の発覚、証拠の音声データの公開、そこから始まる世間の苛烈なバッシング。マスコミに追われて自動車の単独事故を起こし、入院先の看護師によって画像を流出された……

この数か月、マスコミは彼の話題で持ちきりだった。きつと彼にとつてはジェットコースターのような日々だったことだろう。

凛花も事件についてまったく知らないわけではない。ネットニュースやワイドショーを見れば、

常に遼介の話題が流れていた。事件直後はまだそれほど彼について詳しく知らなかったけど、かなり悪意のある報道だと感じられた。

まさか、その遼介と礼子が親戚同士だとは。

礼子によると遼介の父親は婿養子で、若御門家の血を引くのは母親のほうらしい。母親は遼介が学生の頃に他界し、以来、彼女の妹である礼子が母親代わりになって彼のことを気にかけてきたそうだ。一連の事件のあと、遼介をこの山奥の別荘へ匿ったのも礼子の判断らしかった。

遼介がここにいることは、礼子と凛花しか知らない。

なんだかひどく非現実的だなあと、凛花は思う。あの有名な若御門遼介と同じ屋根の下にいる実感が湧かない。明日の朝、目が覚めたら、荻窪にある自分のアパートに戻っていそうだ。

ピーッと炊飯器が鳴り、お米が炊けたことを告げる。辺りに白米のいい匂いがふんわりと漂っていた。土鍋に用意しただし汁もちょうど煮立っている。材料はすでに切り終えていたし、完成までもうすぐだ。凛花は切った材料とごはんを土鍋に入れ雑炊を作り始める。仕上げに溶き卵を入れ土鍋に蓋をした、ちょうどそのとき。

「おい。勝手になにをしている？」

不機嫌な声がキツチンに響いた。

声のしたほうを向くと、遼介が凶悪な顔で立っている。

「勝手なことをされちゃ困る！」

遼介は鋭く凛花を睨みながら言った。

「臍猛なオオカミがぐるぐる喉を鳴らして威嚇しているイメージが、凛花の脳裏をよぎる。

「すみません、勝手なことだっというのとはわかってたんですけど……」

凛花は相手の神経を逆撫でしないよう優しく言った。

「叔母さんが君にどう説明したのか知らないが、こんなことをされても僕としては迷惑なんだ！」

「そうですね。ご迷惑そうだなあとというのは、充分伝わってきます。ですが、私としても一応契約に基づいた仕事ですので……」

「君としても困っている、そう言いたいのか？」

遼介の表情が少し和らいだ気がした。

「端的に言えば、そういうことです」

「こういう場合はどうなるんだ？ 君の雇用主は誰になるわけ？」

「それはもちろん若御門礼子社長です」

「じゃあ、僕が説得すべきは君じゃなくて、叔母さんということになるのか？」

「あ、素晴らしいですね。話が早いです。そのとおりです。通常はご家族同意の上でこういったハウスキーパーをご依頼されるのですが、まれに今回のように、ご家族の間で意見が割れているケースもございます」

「要するに、君としては、叔母と話し合っつてとつと決めろつてことだな？」

「はい。そこまで命令口調ではありませんが、話し合って頂くのが最良かと」

「よくわかったよ」

遼介は「よく」のところに力を込めて言った。

「ご理解頂けて幸いです」

「じゃあ、僕のほうで明日の朝までに叔母と話をつけておくから。君は今夜ここに泊まって、明日一番のバスで帰ってくれ。僕はこんな怪我だからバス停まで送れないけど、ここまで来られたんだ。帰ることだって可能だろ？」

「はい。そういうことでしたら、私としても問題ありません。社長に帰れと言われれば、速やかに帰ります」

「それなら結構だ」

遼介はくたびれたようにため息を吐いた。

キッチンに沈黙が下り、初秋の虫たちの音色がひととき大きく響く。チチチチ、リンリンリーンとまるで一斉に鈴を鳴らしているかのようだ。

彼は少し瘦せたみたいだった。テレビで見たときより頬がこけ、首回りも細くなり、喉仏が尖って見える。着ている浴衣もひどく乱れているし、どう見ても彼には生活を助ける人が必要だった。家政婦じゃなくても、家族とか友人とか恋人とか。

満足に歩けない上に右手が使えないのでは、さぞかし不便だろう。

そのとき、遼介がチラッと土鍋に視線を走らせた。

「あの一、カニ雑炊を作っているんですけど、召し上がりますか？」

声を掛けると、遼介は横目でこちらを見る。

「たくさん作ったので是非どうぞ。カニは社長からの差し入れて、水揚げされたものを空輸してきましたらしいですよ？」

「いや、しかし……」

そう言いながらも土鍋に注がれる遼介の視線は、熱い。

「今夜だけですし、どうぞ召し上がってください。あと煮物と美味しいお漬物もありますよ。私としても、一宿の恩返しがしたいですし」

凜花は控えめに言いつつ、窓際のダイニングテーブルにお膳立てをしていった。そして、自分の分の雑炊はお椀によそってトレイに並べる。

「私はお部屋のほうで頂きますから、お一人でゆっくり召し上がってくださいね。左手でもスプーンとフォークなら食べられると思いますので」

「僕は……いいよ。要らないよ」

「ご遠慮なさらず。片付けはあとでやりますから、食べ終わったらそのままにしておいてください」

凜花は一方的に言うと、返事を待たずにトレイを持ってキッチンをあとにした。

遼介は追ってこない。長い廊下を歩きながら凛花はあれこれ思案した。

食べてくれるといいんだけどな。せつかくの高級食材がもつたいないし。

それにしても、社長はどうするつもりなんだろう？ あの調子だと遼介さんは一歩も引かなそうだがとって、社長も社長で頑固だからなあ……

礼子に帰って来いと言われれば異存はない。凛花は礼子の依頼の下で動いている。契約内容が変わればそのとおりにするだけだ。けど、このまま帰るのはためらわれる気がした。

彼は悪い人じゃないと思う。礼子と遼介の間に挟まれ凛花が困っているの見抜き、ちゃんところらの契約内容を確認してまっとうに対応してくれた。あれだけ苛烈なバッシングを受け続けていたら、見知らぬ相手の話など聞かず追い返してもおかしくないのに、彼はそうしなかった。

できれば彼の力になりたいんだけどな、と思いながら六畳の和室に戻る。

若御門邸は玄関を中心に、横長の長方形に近い形をしていた。

玄関ホールの左右の障子を開けると、板張りの廊下が建物をぐるりと回るように伸びている。その内側には、襖で隔てられたいくつもの和室があった。

凛花は部屋をいくつも見回って回り、玄関から左手の角を曲がってすぐにあった六畳の和室を自分の部屋に決めた。本来ならこの家の主が決めるべきだろうけど、遼介はあんな調子だし「どこか適当に使ってくれ」という言葉どおりにするしかない。どの部屋も長らく使っていないせいか、空気が淀み、ほこりだらけでとても宿泊できる状態ではなかった。その中で、この和室は最近まで誰かが

使っていたのかもしれないと思えるほど綺麗に掃除されていた。

この部屋はいわゆる書院にあたるのだろう。大きな床の間があり、書院障子と呼ばれる小さな障子窓が張り巡らされた欄間には見事な細工が施されていた。しかし、床の間にはなにもない。掛軸を掛けて壺でも置けばかなり見栄えがよくなるのに。

布団は隣の和室の押し入れにあった。少々かび臭いけど畳の上に直に寝るよりはマシだろう。明日天気が良いければ布団を干そうと、心に誓う。一人で夕食を食べたあとに布団を敷き終え、スーツケースの中身を部屋に広げて整頓し、ようやく人心地ついた。

なんだかんだで時刻は二十一時半を過ぎている。とりあえず寝泊まりする準備は整った。あとは社長と遼介の話し合いさえまとまれば……

凛花はスマートフォンを取り出し、SNSを立ち上げる。ちょうどそこに、社長からメッセージが届いた。

若御門礼子…やっほー。遼タンとうまくやってる？

凛花は液晶画面をタップしながら、礼子にメッセージを返した。

野川りんか…お疲れ様です。明日帰って言われました……

若御門礼子…聞いた聞いた。遼タンから激おこの電話かかってきた(笑)

野川りんか…どうなりました？

若御門礼子…契約続行に決まってるでしょ！

野川りんか…それで彼は納得しましたか？

若御門礼子…してないけど、気にすんなー。どうにかなるわー！

凛花はメッセージを読みながら苦笑してしまふ。

ここまでは想像どおりの展開だけど、彼も頑固そうだから先行き不安だ。あの調子だと強引に追い返されそうだし。

若御門礼子…事件については一切触れないで欲しいの。

野川りんか…承知します。大丈夫です。

若御門礼子…さっすが凛花ちゃん。頼りになるわー！

野川りんか…ベストは尽くします。追い返されたら、すみません。

若御門礼子…全然オッケーよ。なにかあつたら電話して。

野川りんか…ありがとうございます。おやすみなさい。

若御門礼子…おやすみー。

そこでやりとりは終わった。スマートフォンを充電器に挿し、ごろりと布団の上に横になる。

社長のことは好きだ。年齢を感じさせない若々しさも、常に新しいことに挑戦しているアグレッシブなところも尊敬している。誰に対しても偉ぶることなく、性格は無邪気でお茶目。いつも面白おかしく笑わせてくれる。このチャーミングな人みたいに年を重ねていけたら、と常々思っていた。経営者としても優秀だと思ふ。いくつか別の会社の役員も兼務していて、順調に利益を上げていくらしい。遼介のことを鑑みると、若御門家は経営に向いている家系なのかもしれない。

——それに比べると私は実に平凡だな。

特技も資格もお金もない。短大を卒業して今の職に就き、この頃ようやくいっぱしの仕事ができるようになったくらいだ。

凛花はいわゆる婚外子で、母一人子一人で育った。非常に貧乏だったけど、母はとても明るい人で、苦勞しながらも愛情深く自分を育ててくれた。父は凛花が六歳のときに亡くなったらしいけど、会ったこともなければ顔も知らない。それでも母は、今も父のことを深く愛しているのだという。

凛花は母と二人で充分幸せだったし、見知らぬ父親に対して憎悪もなければ興味もなかった。

とにかく生活が苦しく、幼い頃から嫌というほど母親の苦勞する姿を目の当たりにしてきた。そんな母を支えるために、学生時代は休みなくバイトをし、同時に奨学金をもらうための勉強も必死でした。卒業したらすぐ今の会社に就職して、青春を謳歌している友人たちから距離を置いて生き

てきた。

母のことは愛しているし、感謝もしている。けど、私は母みたいになりたくない。一時の熱情に浮かされて苦勞する羽目になるような失敗はしたくなかった。堅実な日々を過ごし、きちんと働いて独りでも生きていけるようになりたい。

彼の力になりたいという気持ちに嘘はないけど、凜花にとってはそれ以上に今回の報酬が魅力的だった。

できれば継続したいけれど……

そんなことを考えつつ、そろそろ寝ようと部屋の灯りを落とした。

初日の夜はこうして更けていく。

眠りに落ちる寸前、遼介は雑炊を食べたかな？ という疑問がチラツと脳裏をよぎった。

「というわけで、約束どおり、とつとと帰ってくれないか」

翌朝の八時前、遼介は凜花と顔を合わせるなりそう言った。

あまりの単刀直入っぷりに、思わず絶句してしまふ。

気合を入れて五時に起きた凜花は、さっそく仕事に取り掛かり、超スペシャルな朝食をこしらえた。遼介は昨晚、かに雑炊も煮物も漬物も完食したらしく、一粒のご飯粒も残されていなかった。空になった食器をうれしい気持ちで洗ったばかりなのに。

「えーっと、確か昨日のお話では、礼子社長と話し合われるとのことでしたが？」

凜花は相手の顔色をうかがいながら尋ねる。

「叔母さんとは話し合った」

遼介はきっぱりと断言した。

どうもきっぱりしすぎている感じがするなど、凜花は冷静に見て取る。

遼介は今日も昨日と変わらず、みずぼらしい格好をしていた。もう何日も着ているのか、くしゃくしゃに皺の入った浴衣の襟がはだけ、たくましい胸筋がのぞいている。

「本当に社長と話し合われたんですね？」

凜花が念を押すと、遼介はジロリと睨み返すだけでなにも言わなかった。

仕方なくスマートフォンを取り出し、アドレス帳を開く。今ぐらいの時間なら社長は起きているはずだ。案の定、たったのワンコールで礼子は電話に出た。

『おはよう、凜花ちゃん。遼介がまたゴネてるのかしら？』

礼子は電話に出るなり、ずばりと核心を衝いてきた。

「おはようございます。朝早くにすみません。いえ、ゴネているわけではないんですけど……」

そう言いながら凜花は横目で遼介を見る。彼は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「一応確認です。遼介さんは私が帰ることで社長の了解を得たとおっしゃっているんですが……」

『ぬあにいい!? まーだそんなこと言ってるの? いい? 何度も言うけど契約はこのまま続行よ。』

槍が降ろうが天変地異が起こるうが、たとえ数百億円積まれたって、私はテコでも意見を变えませんからねっ！ ちょっとスピーカー通話にしてちょうだい！』

ふりふり怒っている礼子の指示に従い、スピーカー通話に切り替えた。

『遼介！ なに凜花ちゃんに嘘吐いてるのよ！ 勝手な真似は許しませんよ!!』

礼子はいつになく厳しい口調で言った。しかも昨日みたいに愛称ではなく、呼び捨てだ。

「勝手なのはどっちですか！ 僕は家政婦なんて頼んでない！ 僕の領域に土足で踏み込まないでください」

だが、遼介も負けじと言い返す。

凜花はハラハラしながら二人のやりとりを聞いていた。

『あなたはたった一人の甥っ子なの。私は多少無理をしてもガンガン踏み込んで、あなたを守るわよ！』

「守ってもらわなければならない。僕は一人でどうにかなりません。彼女には帰ってもらって下さい！」

『ぬあーにが一人でどうにかなるよ！ どうせロクにご飯も食わずにガリガリに痩せて、一度も洗濯してないボロボロの浴衣ゆかたでも着て、髪もひげも伸び放題で栄養ドリンク啜すすってるのが関せきの山でしょうよ』

礼子はまるで見てきたように言った。

横で聞きながら凜花は、千里眼せんりやんだなど感心する。

「そ、そりゃ、怪我もしている完璧とは言えませんが、やっていけないレベルじゃない。助けは要らない。はつきり言っただけで迷惑だ」

『迷惑？ そんなの、凜花ちゃんのほうがよっぽど迷惑をこうむってるのよ！ そんなこともわからないあなたじゃないでしょう？』

「もう、放っておいてくれっ!!」

遼介の悲痛な叫びが、凜花の胸にぐさりと突き刺さった。

絶望、苛立ち、無念、悲しみ……声の響きの中に、複雑かたに絡み合った感情の糸が垣間見えた。急に悪いことをしている気分になってくる。彼の言うとおりで。いくら家族だからって、彼の考えや生き方に土足で踏み込んでいい理由なんて存在しない……

『ねえ遼介、なにをそんなに怖がっているの？ 私のことを信用していないの？ 叔母であるこの私が、あなたの害になる人物を送り込んだりするわけじゃない』

「信用していないわけじゃない。ただ、もう放っておいて欲しいだけ……」

『放っておくわよ。凜花ちゃんがあなたの生活に干渉することを恐れてるみたいだけど、それは思いついておきよ。彼女はあなたの食事を作りに来ただけ。あなたが望めば、一切顔も合わせず会話もせず、見えない妖精みたいにご飯だけ作ってくれるわよ。ねえ、凜花ちゃん？』

突然話を振られ、凜花はどきまぎしつづつ答えた。

「もちろんです。できる限りお客さまのご要望どおりにします。見えない妖精みたいに振る舞えと言われれば、そういたします」

『遼介、聞こえた？ 誰もがあなたに興味津々というわけじゃないのよ。凛花ちゃんみたいに仕事だけに徹する人もこの世には存在するの。彼女は信用できるわ。あなたのことをあれこれ詮索しないし、ましてや個人情報もリークするなんて有り得ない。何度も言うけど、そんな人間を送り込んだりするわけじゃない？ 私は何年経営者をやっていると思ってるの？』

「……本当に食事を作るだけですか？ それ以外のコミュニケーションは一切ない？」

遼介はまだ不信感が拭えないような顔で言う。

『あなたがそう望めばね』

「もちろん僕はそう望みます」

『よし、なら決まりね。凛花ちゃんの契約は続行。ただし、遼介とのコミュニケーションは一切なし。三食栄養たっぷりのご飯を作るだけ』

「見えない妖精みたいにね」

遼介が冗談まじりに言うのと、礼子はうれしそうに便乗した。

『そう、見えない妖精みたいにね。朝、起きたら食卓にはゴージャスな朝ごはん。だけど、作った人の姿はない……それで行きましょう！』

「まったく、なんかいいように丸め込まれた気もするけど、もうそれでいいですよ」

『遼介、凛花ちゃんにお世話になるんだから、その傲慢で横柄な態度をどうかしなさいよ！』

「わかったわかった」

『本当にわかってるのかしら？ 凛花ちゃん、なにかあったらいつでも電話頂戴ね。おばさん、二十四時間仁王立ちして待ち構えているから。クレームでも悪口でも』

「わかりました。お気遣いありがとうございます」

凛花が御礼を述べると、礼子は満足げに言った。

『はい。じゃあ、この件はこれで終わり。じゃ私、出社するから。バイバイ！』

そこで通話は切れる。

礼子のキャピキャピした声の余韻が、しばらくこの場に漂っているようだった。

「まったく、いつもこんな調子だ。叔母さんは今も僕のことを小さい子供だと思ってる」

遼介はぶつぶつ愚痴った。

「そうみたいですね。きつと遼介さんのことをとても大切に思われてるんだと思います」

「ああ。実はそうなんだ」

遼介は否定せず、ダイニングチェアに落下するように座った。テーブルには凛花が腕によりをかけて作った朝食が並んでいる。

「巻き込まれた君には申し訳ないけど、そういうことだから」

「承知しました。朝昼夜とお食事を作って、こちらにご用意しておきますね」

「僕のほうで、まあ……いろいろあつて、ちよつと参つてるんだ」

「大丈夫です。理由や経緯は問いません。こうしたいというご要望があれば無条件に従います。それが弊社の企業理念でもあります」

「素晴らしい理念だね」

「お食事の時間だけ教えてください」

その後、二人は食事の時間を決め、その他生活に必要ないくつかの事項について話し合った。遼介は車の鍵のありかを教えたあと、こう付け加える。

「僕はしばらく車に乗れないから、表の車は好きに使つていい。鍵さえ元の場所に戻しておいてくれれば。あと、風呂もトイレも納屋も、この屋敷にあるものはなんでも遠慮なく使つてもらつて構わないから。他になにかわからないことはある？」

「いえ、今のところありません。極力、自力でなんとかします。どうしようもないときだけ、指示を仰ぎにうかがつてもいいでしょうか？」

「それで問題ない。助かるよ。ビジネスライクに徹してくれると」

では失礼します、と言って立ち去ろうとした凛花を、遼介が呼びとめた。

「まだなにか？」

「いや、君はその……僕の事件を……」

遼介はゴニョゴニョ言つてから、やがて首を横に振る。

「ごめん。なんでもない」

「そうですか。では、失礼します」

凛花は淡々と言つて、遼介を残しキッチンをあとにした。

長い廊下を歩きながら、遼介とのやりとりを振り返る。彼はたぶん「僕の事件を知っているか」と聞きたかつたのだろう。あるいは「僕の事件をどう思うか」とか。

事件のことには触れてはならないと、礼子にも念を押されていた。この仕事でもっとも大切なことは、お客さまのプライバシーを詮索しないことだ。

とんでもないことを目にしたり耳にしたりしても、一切口外しない。見なかつた振りをする。これが鉄則。見聞きしたことを第三者に話すなんて論外、写真をリークするなんてもつてのほかだ。

口は災いのもと。

プロに必要なものはなにかと問われれば、余計なことを一切話さないことだと答える。これは別に家政婦に限つた話じゃない。他人を不用意に傷つけないためにも、自分を守るためにも必要なことだ。このルールは入社したときに社長の礼子に教わつた。現場に出た今となっては、大切なことだと実感している。

とりあえずは追い返されなくてよかった……

一抹の不安を残しつつも、凛花は自室に戻つてうしろ手に襖を閉めた。

それから、二人の奇妙な同居生活が始まった。

毎朝凜花は六時に起床し、着替えてすぐキッチンへ行く。前日に遼介が食べ終えた食器を洗って片付け、朝食の準備に取り掛かる。一時間半ぐらいで作り終え、ダイニングテーブルの上にセットしてから自室に戻って自分の朝食を食べる。そのあとは洗濯だ。バスルームはキッチンの北側にあり、広々とした脱衣所に大型の全自動洗濯機が置いてあった。

昼食は十一時頃から作り始める。普段の仕事では、昼食か夕食のどちらかだけを作ることが多く、毎日三食作るとなるとメニューを考えるのに骨が折れた。

栄養価が高くヘルシーなメニューにし、なるべくバラエティに富んだ内容になるよう心を砕いた。その甲斐もあつてか、遼介が食事を残したことは一度もない。彼とは顔を合わせないけれど、凜花が食事を作り、彼がそれを残さず綺麗に食べるといふ繰り返りで、目に見えない信頼関係が少しずつ構築されていくのを感じられた。

夕食作りに着手するのは十七時頃だ。カロリー計算をしつつ、ときどき甘いデザートも用意した。言葉を交わせない分、料理で好意を示したいと思ったからだ。私はあなたの敵じゃないですよ、あなたを応援しています、という気持ちを伝えたかった。

たまに廊下で遼介とすれ違つても「お疲れ様です」と言つて目を逸らし、素早くその場を去つた。目に見えない妖精のように振る舞うというミッシェンを遂行するべく可能な限り努力した。

毎日のルーチンを静かにこなしながら、空いている時間はほとんど読書に費やした。

若御門邸には離れに大きな書庫がある。一棟丸々ぎつしり本の詰まった書棚という、ちよつとした図書館レベルだった。中には、凜花では判読できない古すぎる蔵書もあったけど、近代文学や最近の文庫、海外の翻訳ものなども交ざつていた。

空いた時間に脚立によじ上つては読めそうな本を探し、二、三冊引き抜いて自室に持ち帰る。「この屋敷にあるものは遠慮なく使つてもらつて構わない」という遼介の言葉に甘えることにした。

この家には二人いるはずなのに、まるで一人で生活しているようだ。遼介と会わないように気を配つてはいるものの、特に監視の目もないし、うるさく言われることもない。ある意味、大変気楽な仕事だ。毎日料理を作つては本を読み、洗濯をして食器を洗つて買い出しに出掛け、たまに使つていないほこりだらけの和室を掃除して過ごした。

大自然の中で規則正しい生活を送っていると、自分の中でゆがんでいたものが、ゆつくりと正常に戻つていく気がした。無理をしたり、なにかを強制されたりすることもなく、言うなれば長らく患つていた腹痛がすうーっと和らいでいくような、いい気分だった。

都会でせわしなく仕事をしているうちに結構疲れていたんだなど、初めて自分の状態に気づく。こんな風に静かな場所で、住まいや金銭の心配をせず、軽い仕事をこなすだけでいいなんて。社長に感謝しなくちゃと思う。もしかしたら休暇を取らせてくれたのかもしれない。

ここへ来てから一週間が過ぎ、暦は九月の中旬に差しかかる。

その夜も、仕事を終えてシャワーを浴び、眠るまでの時間を本を読んで過ごしていた。ここへ来

てからはスマートフォンをいじる気になれず、もっぱら通話にしか使っていない。都内にいたときに進めていたゲームもハマっていたSNSも放ったらかしだ。

山奥の静謐にどっぷり身を浸し、じっと活字を追っているのが心地よかった。

外では弱い雨が降り注ぎ、木立が揺れる気配がする。このところずっと雨だ。雨音に耳を澄ませたり、雨の匂いを嗅いだりするの好きだった。絶え間なく落ちてくる雨粒が、山の空気をより清涼に変えてくれる気がする。

読んでいるのは遼介が著した『話し方で人を魅了する、三分の法則』という自己啓発本だ。この手の本を読んだことはないけれど、書庫の隅に積み上げられているのを見つけ、興味本位で手にとった。ページをめくると思ったとおりの内容で、ビジネスマン向けのスキルトレーニングの本だった。要約すると、話し方はすべての基本であり、話し方を変えるだけで劇的に交渉が有利になるというものだ。表情の作り方から声の出し方、TPOに応じた論旨の展開、好感度を高め相手の自尊心をくすぐる秘訣といった手法が図解つきで書かれている。

プレゼンテーションや契約交渉をする機会のない凛花にとっては無縁の本だ。けれど、読んでいるうちに文章の持つ熱量に引き込まれ、気づいたら次々とページをめくっていた。これを書いた遼介の熱い気持ちが自然と伝わってくる。

大きな夢を描き、強い情熱を傾け、「本当に人は変われる。変わろう、成功しよう」とまっすぐ訴えかけている。エモーショナルな輝きが、行間からほとばしってくるようだ。読んでいる者を

力づけたい、ビジネスで悩む人を応援したい、そんな一途な愛情を感じた。

本を読み終わる頃には、この人はやっぱりすごいと本気で感動した。自己啓発本をどこか斜に見ていた凛花でさえこうなのだから、彼の考えに傾倒する読者が多いのもうなずける。

マスコミは彼のファンを「若御門信者」と揶揄していたけど、信者になる気持ちもわかるというものだ。自己啓発本なんて小手先の誤魔化しだと思っていた。しかし、もっと精神の深いところに限差し、生きる意味にまで触れているんだと認識を改めた。

凛花は読み終わった本を閉じて、目を閉じる。

こうして考えると、例の事件は本当に残念だったと思う。あの事件さえなければ、彼は今でも第一線で人々のために活躍していたはずだ。

彼の名前をネットで検索すれば、おびただしいニュースや動画や著書がヒットする。嘘か本当かわからない、女優やモデルとの熱愛記事まである。ゴシップに興味はまったくないけれど、お客さまのことがある程度知っておくのは大切なので、ひととおり目を通した。

例の事件については目を覆いたくなるほどひどい書かれ方をしていた。素人ながら名誉毀損で訴えれば勝てそうだと思うけれど、どこから湧いてくるかわからない有象無象の匿名集団を相手はどう戦えばいいのか、まったく想像がつかなかった。

「遼介さんの事件は、冤罪なんですか？」

ここへ来る前に凛花がそう尋ねると、礼子は厳しい表情で答えた。

「冤罪かどうかなんて質問自体がナンセンスなのよ。遼介は少し目立ち過ぎたのね。知らずに嫉妬を買ひ、前もって用意された罠に嵌められたの。証拠はかなり用意周到に準備されている。冷静に見ても、遼介に勝ち目は無いでしょうね」

「そんな……、どうにかならないんですか？ 相手を逆に訴えるとか……」

礼子は首を横に振り、力なくこう答えた。

「私も遼介も、何人ものプロの手を借りてとことん検討したわ。でも、結果は否よ。今回は相手の策が周到すぎた」

「そんな……そんなのってあんまりです！」

「凜花ちゃん、よく覚えておいて。これは裁判で無罪を勝ち取ればいいという単純な話じゃないの。この世は概ね多数決で動いている。だから、多数の人がこの人は犯罪者に違いないと思えば、おのずとその流れになつていくのよ。さらに残念なことに、世間の人々は、誰かを裁きたいという暗い衝動を抱えているわ。よほど慎重に進めたとしても、まずこちらに勝ち目は無い。暴力の本質ってそういうものよ」

「けど、なら、どうすれば……」

「私たちが信じて支えるしかないわ。だから、凜花ちゃんもあの子を信じて欲しいの。なにが正しいかじゃなくて、あなたがなにを信じるかよ。どう？ あなたは遼介を信じられそう？」

「もちろんです。私は社長を信じてます。だから……社長の信じる遼介さんも信じられます」

「それで結構よ」

礼子はうれしそうにニッコリ笑った。

「やっぱりあなたを選んで正解だったわ。今の遼介に必要なのは、彼の無実を信じる人を一人でも多く傍に置くことよ。そしてなにより三食きちんと取って、しっかりと眠ることだわ。それが人間の基本だもの。そうでしょう？」

「そうですね。そのとおりだと思います」

「メンタルケアをしてくれなんて言わないから安心して。ただあの子にご飯を食べさせてあげて欲しいの」

かくして、凜花はここに来た。礼子の言を借りれば、遼介にご飯を食べさせるために、こうして山奥までやってきたのだ。今のところ仕事は順調にいつている。良好な関係には程遠いけれど、とりあえず追いつ返されることなく毎日が問題なく過ぎていた。

凜花は閉じていた目を開き、ふーっと息を吐く。

社会の評価がどうであれ、彼がすごい人であることは変わらない。

凜花は立ち上がって灯りを消し、布団に入る。特にやることもないし、今日は早めに眠ってしまおう。

目を閉じると、雨の音が耳に心地よく響いた。

膠着状態くわくちょうに変化が訪れたのは、翌日の朝だった。

いつもどおり六時過ぎに凜花がキッチンへ行くと、遼介がダイニングチェアに座っているのが見えた。左ひじをテーブルに載せて頬杖をつき、視線は窓の外に注がれている。

凜花は息を潜め、彼の姿に見入った。

遼介がそこにいるだけでキッチンの空気がガラリと変わる。雨天の早朝の鈍い光が彼のすっと通った高い鼻梁びりやうを縁取っていた。眉は凜々しく、雨を映す瞳はとても澄んでいる。皺しわくちやの浴衣ゆかたを着てひげも髪も伸び放題なのに、静謐せいひつな美しさがあった。

印象深い横顔だった。

じつと押し殺した感情が、じわじわと空気を伝つてくる。

それは、深い哀しみとあきらめのようなものだった。見ているだけで、胸が締めつけられるような苦しさを覚える。彼のまもつている空気が、物憂げな瞳の色が、見る者を切なくさせるのだ。

見てはいけないものを見てしまった気がして、凜花はすぐさま踵かかとを返す。

しかし、廊下に戻ろうとした背中に「ちよつと待つてくれ！ 話があるんだ」という遼介の声が掛かった。

「……おはようございます。どうしたんですか？」

凜花はキッチンのドアを少し開け、おずおずと聞いた。

「ちよつと話があるから、中へ入ってくれ」

凜花はキッチンに入り、遼介に促うながされてダイニングテーブルを挟んだ彼の向かいに座った。

さきほどの静謐せいひつな雰囲気とは打って変わって、遼介の瞳は冷淡だ。しかし、よく見ると初めて会ったときより顔色がよく、少しふつくらした印象を受けた。毎日のご飯の効果がでてきたかなど、凜花はチラツと思う。

ややあつて、遼介がおもむろに切り出した。

「実は頼みたいことがある」

「はい。なんででしょうか？」

「その前にいくつか質問したいんだけど、この仕事はどれぐらいやっているの？」

「ちょうど六年目になります。介護職員初任者研修は修了しています」

「ふーん。いつも今回と同じような住み込みの仕事を？」

「いえ。普段は在宅介護の支援が多いですね。リハビリの援助ですとか、付き添いですとか」

「今、二十六歳だよな？」

「そうです」

「こう言つてはなんだけど、大丈夫なの？ つまり……」

遼介が言いにくそうにしているのを見てピンときた凜花は、言葉のあとを引き取る。

「つまり、私みたいな若い女性が独身男性の家に住み込みで働くのは、大丈夫かってことですか？」

ズバリ言つた凜花を、遼介は呆気に取られたように見たあと「そうだ」とうなずいた。

「住み込みの仕事はこれが初めてです。というか、ご依頼自体がほとんどありません。今回は本当に特別で、礼子社長に直接頼まれたので引き受けたんです」

「叔母さんのことだ。破格の報酬でもちらつかせたんじゃないか」

「そうですね。そのとおりです」

格好をつけてもしようがないので、凛花は正直に認めた。

「それなら安心だ。こんなに妙な条件の仕事、普通なら誰も引き受けないだろうからな」

イエスと言うのも気が引けて、凛花は黙っていた。

遼介は眉根を寄せ、親指で自らの唇をなぞっている。

薄くてとても綺麗な形をした唇だと思った。上唇の中心にある二つの山の形が美しく、唇の端に向かつてキリッと引き結ばれている。ふと触れてみたいような気になって、胸の奥が疼いた。けど、彼の冷やかな眼差しを見て、凛花はその気持ちを打ち消す。こちらを好ましく思っていないことは明らかだった。

「ならば、僕が仕事を頼んでも問題ないわけだな。君は十分な報酬を受け取っているわけだから」

「もちろんです。できる限りサポートさせて頂きます」

「僕をふもとの病院に連れて行って欲しい」

「通院介助ですね。かしこまりました。お日にちはいつですか？」

「明日の十三時に来いって言われている」

「十三時ですね。ここから病院までどれぐらいかかりますか？」

「二時間以内で行ける。ナビがあるが道順は……」

二人は簡単に明日の打ち合わせをした。ひととおり確認が終わったあと、遼介は「以上だ」と言って立ち上がろうとする。

「あのっ！」

凛花は思わず呼びとめてしまう。そして、遠慮しつつも思い切って彼に申し出た。

「あの、そのままで行かれますか？」

「は？ そのまま？」

「ですから、その、お顔とか……」

「ああ。これ？」

遼介は、左手で伸びたひげを撫で回した。

「仕方ない。電気シェーバーを持ってくるのを忘れてしまったんだ」

「なら、明日ふもとで買いますよ。この家に剃刀はないんですか？」

「いや、T字型の剃刀ならある。ただ、左手しか使えないからうまく剃れなくてあきらめた」

「よかったら、お手伝いしましょうか？」

「手伝う？ 君が？」

「はい。あ、本来ならお顔を剃るのは理容師の資格が必要なんです……」

「あーいいいいよ。そういうのは無視で。やってくれるなら、多少切れたって構わない」

「切ったりしませんよ。大丈夫です」

「ふーん、そういうのも契約に入ってるの？」

「はい。基本にお客さまが快適に過ごせるよう、臨機応変に対応します」

そう言った凛花を、遼介は不快感も露わに眺めた。凛花はそれをポーカーフェイスで受け流す。

失礼だとか態度が悪いだとか、いちいち怒っていたら身が持たない。もつとひどいお客さまなんて山のようにいるんだから。

「……なら、よろしく頼むよ」

数秒ののち、遼介はボソボソ言った。

こうして、凛花は遼介のひげを剃ることになった。

プラスチックの剃刀が、白い泡まみれのひげを巻き込みながら、滑る。

剃刀が通った跡には、つるりとした皮膚が現れた。遼介の肌は褐色で、添えられた凛花の指がより白く見える。

二人は若御門邸の脱衣所にいた。遼介は洗面台の前のスツールに腰掛け、凛花は立ったまま作業している。脱衣所は超モダンにリフォームされていて、どこかの旅館かと見まごうほどの広さがあった。二つある洗面台の壁一面に鏡が張られ、鏡に向かって左手は全面ガラス張りになっている。

そこから溪谷に生い茂る緑の木立が見渡せた。

凛花は皮膚を切らないよう注意しながら、T字型の剃刀を何度も滑らせていく。間もなく、ひげに覆われていた左頬が全貌を現した。

「すみません。ちよつと唇を触ってもいいですか？」

唇の横は毛穴の角度が横向きで剃りづらい。凛花が声を掛けると、遼介は目を閉じたまま「いいよ」と答える。凛花は左手の親指で、そつと彼の唇をpushさえた。

一瞬、触れた唇の柔らかさにドキリとする。けれどすぐに雑念を振り払い、剃刀に神経を集中させた。

遼介は、はだけた浴衣を腰の辺りまで落とし、鍛えられた上半身を晒している。凛花は作業に集中するためにかなりの努力が必要だった。

体脂肪何パーセントぐらいだろ？ 五パーセントとか!?

つい意識が彼の裸体に向いてしまう。遼介はいわゆる細マッチョで、無駄な肉がすべて削ぎ落とされたかのように筋肉質な体をしていた。痩せているせいで鎖骨や喉仏、肩の骨が浮き出ている。極限まで節制した修行僧の如く硬質な色気を放っている。腹筋は六つに割れて、胸筋は丸く盛り上がり、谷間に薄く体毛が生えていた。特に鍛えているのか上腕だけが妙に太く、野性的ですごく素敵だ。

凛花は速まる鼓動を抑えようと、懸命に「これは仕事だこれは仕事だ」と頭の中で何度も唱えた。

仕事柄、入浴の介助をする機会も多く、男性の裸体なんて見慣れている。お客さまを支えるために抱き合ったこともあるし、場合によっては下の世話だってがつつりやっている。

そのとき、凛花は皆川みながわの皺しわだらけの顔を思い浮かべた。皆川とは顧客の一人で八十七歳の男性だ。食事と入浴の介助、病院への通院介助を希望された。皆川は寝たきりだけど意識ははっきりしていて、いろいろな話をする。彼は昔、不動産会社の社長をやっていて、あまたの土地売買契約の仲介で活躍したそうだ。三十代で今の奥さんと結婚し、三人の娘をもうけ、ささやかながらも幸せな結婚生活だったらしい。皆川と話するのは楽しく、いつも笑顔で感謝されるので、凛花は充実感で幸せな気分になれた。

皆川さんの裸体なら見慣れている。皆川さんも同じ男性。同じお客さま。遼介さんと変わらない。おんなじおんなじ……

凛花は自分に言い聞かせるように頭の中で繰り返す。

思い返せば彼氏いない歴約七年、年代の近い男性にまったく免疫めんえきがない自分が情けなかった。どぎまぎする凛花をよそに、遼介は目を閉じて顎あごを軽く上げ、平然と身を委ねている。ひげを落としたあとの顔は精巧な人形みたいに整っていた。しみ一つない肌は滑らかで、顎あごや頬はシャープなラインを描き、特にキリッと結ばれた唇の形が美しい。閉じたまぶたの先に、長く艶つややかなまつ毛が伸びていた。

こんな綺麗な人だったっけ……？

テレビで見たときも美形だと思っただけど、実物はより洗練されていた。一時期より痩せたことで、鋭い刃物のような凄味が増している。それでいて、こうして目を閉じてじっとしていると、まるで神に祈りを捧げる信徒のように神秘的な美しさがあった。

凛花は胸を下キドキさせながら右頬に取り掛かる。指先で彼の耳の横にそっと触れると、皮膚の表面はひんやりしていた。彼の肌の感触をなぜか心地よく思いながら剃刀かみそりを滑らせてゆく。

そのとき、不意に遼介が目を開けた。

とっさに凛花は動きを止める。

遼介の目は細く、切れ長の目尻は少し吊り上がっていた。見る者を一切拒絶するような尖った印象を受ける。遼介は眼球だけギョロリと動かし、凛花を横目で見た。近くで見ると、彼の瞳は茶色よりさらに薄い澄んだ飴色あめいろだ。不機嫌なのを隠そうともせず、嫌悪に満ちた表情をしている。凛花が特別嫌いというより、人そのものを深く恨んでいるとかそういう感じがした。

「そこまで優しくやらなくていい」

遼介は冷淡に言う。

「は、はい」

「少しくらい切れてもいいし血が出てもいいから、もつとガシガシやってくれ」

「わかりました」

凛花は気を取り直し、彼の言葉どおり大胆に剃刀かみそりを動かし始める。遼介はそれ以上の会話は無用

とばかりに、ふたたびまぶたを閉じた。

親しみやすさってヤツが皆無だなあと、凧花はしみじみ思う。

まるで難攻不落の要塞に立てこもっているような人だ。周りをぐるりと高い壁で囲んで有刺鉄線（ゆうしつてせん）を張り巡（めぐ）らせ、さらに高圧電流を流して近づく者を徹底的に遠ざけるレベルの気迫を感じる。絶対に余計な話をしないし、絶対に気を許さないし、絶対にプライベートへ踏み込ませない。

仕事相手にここまで頑（かた）な態度を取られたのは就職以来初めてで戸惑（戸惑）ってしまう。必要以上に仲良くすることもないけど、あまりに不機嫌な態度を取られ続けるとやりづらしいし、自信を失くしてしまう。

——元はそんなに悪い子じゃないのよ。頭もイイし、顔もイイし、とつてもお茶目で優しい子なの。

初日の礼子の言葉が思い返された。

私はあなたの敵じゃないんだけどな。

彼はたとえるなら手負いの野生獣みたいだ。毛を逆立てて牙を剥（む）き出し、近づく者すべてを威嚇（いかく）する。敵じゃないと意思表示したくても言葉は通じないし、わかり合えることもない。こうして触れ合っているのに、心の距離は遥かに遠い。

そうこうする内にひげを無事に剃（そ）り終えた。「終わりました」と言うと、遼介はパチツと目を開けて鏡を見つめる。

「さっぱりした」

遼介は言葉どおりさっぱりした顔で言った。

鏡にはひどく冷めた目をした、眉目秀麗（ひよくしゆうれい）な男が映っている。ひげを剃（そ）っただけでガラリと雰囲気が変わり、テレビに出ていたかつての彼に近くなった。長身で筋肉質な体躯と印象的な美貌を持つ彼が、モデルや俳優じゃないのが不思議なぐらいだ。むしろ本業の人たちより独特のオーラがあって目を引くような気がする。

「また伸びてきたら、いつでもお申しつけください」

凧花がそう言うと、遼介は鏡を睨（にら）みつつ黙（もく）つてうなずいた。

凧花は後片付けを始める。タオルを洗濯かごに放り込み、使い終わった剃刀（かみそり）を洗い、自分の手も洗った。洗面台周りをスポンジで軽く磨き、毛の落ちた床にフローリングワイパーをかける。ふと顔を上げると、すでに遼介の姿はなかった。

「まったく。一言のお礼もなしですか」

とはいえ、お礼や優しい言葉を期待するのは贅（ぜい）沢（たく）というものだ。仲良くなるために仕事をしていくわけじゃない。報酬をもらってここにいるんだから。彼が怒（おこ）ろうが喚（わめ）こうが宇宙語（うちゅうご）を話（はな）そうが、分け隔（へだ）てなく常に同じサービスを提供するのがプロというものだ。

わかっているんだけど、やっぱりちよっと寂（さび）しいんだよね……

そう感じてしまう理由が自分でもよくわからないまま、脱衣所の灯りを落とした。